

クリミア戦争は歴史の巨大な転換点・分水嶺として再評価されるべきもので、その重要な視点は「輿論・ポピュリズム」と「戦争の産業化」である。クリミア戦争は史上初めてジャーナリズムと世論が招来した戦争だった。鉄道的发展と共に全国紙が出現し、世論が新聞により一般国民を巻き込む形で形成される。**ポピュリズムの登場**である。一方、この戦争は軍事史上、「戦争の産業化」といわれる大変革で、武器・戦術の一大改革でもあった。

英仏軍は有効射程が約 1000 ヤードのミニエー銃を装備、有効射程 200 ヤードのマスケット銃装備の露軍を圧倒した。当時、武器の性能の差は圧倒的で、アヘン戦争では、僅か 4 千のインド人主体の英軍が、清の全稼働兵力を打ち破り、太平天国の乱では、百人程度でスタートしたゴードンのミニエー銃装備の常勝軍が各地で太平天国軍を蹴散らした。英国はこのような赤子の手を捻るようなコストのかからない戦争を世界各地で 72 回繰り返し、大英帝国を築いた。これが植民地戦争である。当時、高杉晋作は上海に渡り、この事実を実見し、長州は洋式軍制装備に切り替える。薩摩も同様で、更にグラバーに接近し、武器の購入ルートを確認した。かくして幕長戦争において、僅か 3 千のミニエー銃装備の長州軍が 15 万の幕府軍を蹴散らし、鳥羽伏見では 4 千の薩長軍が 1 万 5 千の幕府軍を圧倒した。植民地戦争の再現であった。

何故グラバーは薩長に武器を売ったか。薩長が豊かだったからである。両藩は関が原の西軍であり、財政が行き詰まり、多額の負債を抱えた。それを財政改革により、借金を踏み倒し、薩摩は黒糖事業と密貿易で儲け、長州は下関に倉庫を設け、北前船の大中継地として倉庫・金融中心の商社経営で、蠟・紙・塩等の国産品の取引を行い、更に蝦夷の海産品の密貿易で儲けた。彼らは商業・密貿易に活路を求めた。従って彼らは本来開国派であった。だが実際に開国してみると、交易の中心は横浜・長崎・函館での外国商人の直接取引が主体となり、彼らの密貿易その他の商圏・利益源がずたずたにされた。そこで薩長は急遽攘夷派に鞍替えし、攘夷決行に踏み切った。

長州の攘夷決行には裏がある。実はクリミア戦争で生まれた戦訓がデュークの戦術論で、「戦場で最も重要なのは士気維持。恐怖心による逃亡を抑制する指揮官の能力で、上官を尊敬・信用させ戦友を信頼させること。連帯意識を育てる組織作りが重要で、それには部隊単位の猛訓練が不可欠。戦場では小規模な戦闘単位が決定的に重要」という原理を説く。事実、仏軍士官は貴族出身の英国士官に比べ、兵とは互いに社会的に身近な存在で、市民軍である仏軍は連帯意識・統率力・戦闘能力で英軍より優れていた。薩長軍はこの原理を学んでいた。どの藩でも武士の洋式軍制化は極めて困難。武士の上下関係は、均質な兵士で作られる洋式軍制には合わない。こうした頑なな上級藩士の観念を打破するために敗北を覚悟で、高杉晋作等は洋式軍制改革を実現するために、攘夷決行を利用する。案の定、正規藩士軍は役に立たず、かくして武士・庶民混合の奇兵隊が生まれた。薩長は勝つべくして勝った。

ところで、ミニエー銃製造にはより高い精度を要し、製造が困難。この難関を合衆国陸軍工廠が自動式プライス盤による同形部品の大量生産技術で突破した。だが設備固定費が膨大で、大量生産によるコストダウンが必須だった。そこで多くの民間企業が生まれ、大量生産が始まり、コスト低減のため積極的に外国から受注し、ほとんどが海外に売られた。武器の大量生産時代の到来であり、「戦争の産業化」であり、死の商人の時代となる。